

(別紙 1)

## 論文の内容の要旨

論文題目 平家物語の歴史と芸能

氏 名 兵 藤 裕 己

『平家物語』を語る琵琶法師の同業者組織を、当道という。室町時代をつうじて行なわれた語り物「平家」の芸能座だが、徳川家康が征夷大將軍に任じられた慶長八年（一六〇三）、惣検校（当道の最高責任者）伊豆円一は、家康から当道の保護を約束されている。

人皇百八代後陽成院の御宇、慶長八年癸卯 源家康公、天下御一統に治めさせ給ふ節、時の職役、伊豆惣検校円一、恐悦に罷り出で、先例の通り御礼申し上げ終りぬ。時に東照宮、当道古代の儀御尋ね有らせらるゝに依て、伊豆惣検校円一、古例の趣、一々申し上げしかば、東照宮、聞こし召し為され、当道の格式、古例の通り相守るべき旨、…(中略)…仰せ付け為さる。 (『当道大記録』「東照宮御改正配当之事」)

近世の当道では、將軍宣下にさいして惣検校は江戸城に出仕し、新將軍の前で「平家」を演奏する慣例があった。また、將軍新喪の法会にも惣検校が出仕して「平家」を演奏する。江戸時代の「平家」は、大衆あいての芸能としてより、徳川將軍家の式楽として存在したのだが、このような当道と將軍家とのかかわりは、じつは前代の足利將軍の時代までさかのぼるのである。

たとえば、江戸時代に行なわれた毎年正月十四日の惣検校の將軍家参賀は、すでに室町時代に行なわれている。また四月下旬、足利將軍の北野社参籠に惣検校が出仕する慣例があったことも記録から確認できる。徳川家康が將軍となった慶長八年、惣検校伊豆円一が「先例の通り」新將軍に拝謁したとあるのも、当道と將軍家との関わりが前代からの慣例であったことをうかがわせる。

ところで、「平家」を語る琵琶法師が畿内を中心とした広範な座組織（当道）を形成し

たのは、南北朝時代である。当道の記録類は、南北朝時代の覚一検校を、当道の「中興開山」と伝えているが、覚一の事績としてたしかなものに、「平家」語りの最初の正本、いわゆる覚一本『平家物語』の作成があげられる。

覚一本の奥書によれば、応安四年（一三七一）三月、七十歳を過ぎた覚一が、自分の死後に伝承上の「諍論」が起こることを予測し、「後証に備へ」るべく「口筆を以て書写」したのが本書であるという。伝承を確定しておくことが、座組織の維持と不可分の関係にあったのだが、しかし覚一本の伝来に関して注目されるのは、奥書で、歴代の惣検校以外は所持することを禁じられた本書が、覚一の没後しばらくして足利將軍に進上されたことだ。すなわち、摂津国川辺郡（兵庫県尼崎市）大覚寺の所蔵文書に記載された覚一本奥書によれば、定一（覚一の後継者）によって清書された覚一本は、定一の死後、「室町殿」（足利義満）に進上されたという。

当道の正本（覚一本）はなぜ足利義満に進上されたのか。進上された正本は、すくなくとも八代將軍義政のころまで將軍家に保管されていたことが確認されるが、正本の閉鎖的な伝授が当道の内部支配を権威的に補完していた以上、それが足利義満に進上されたことは、当道の支配権（その権威的な源泉）が足利將軍家にゆだねられたことを意味している。

げんに応永年間（一三九四～一三四七）以降、足利義持（四代將軍）、義教（六代將軍）が当道にたいして格別の発言権を行使していたことは、史料から確認できる。「平家」語りの芸能、およびその座組織が足利將軍の管理下に置かれていたわけで、その一つのきっかけが、足利義満への正本の進上にあつたことはたしかである。

ところで、足利政権が成立した南北朝時代は、語り物「平家」が流行のピークをむかえた時代である。それに関連して注意されるのは、この時代の政治史が、『平家物語』に規制されて推移していたことである。たとえば、元弘年間（一三三一～一三三四）に起こった反北条（北条は桓武平氏を称している）の内乱が、あれほど急速に足利・新田（ともに清和源氏の嫡流家）の傘下に糾合されたこと、また北条（平家）が滅亡したのち、内乱が公家一統政治として落着することなく、ただちに足利・新田の覇権抗争へ展開した事実をみても、武士たちの動向がいかに源平合戦の物語に左右されていたかがうかがえる。

足利將軍が全国に号令を発することができた根拠は、なによりも当時の武士たちに共有された源平合戦の物語にあつたろう。「平家」の物語が、政治史の推移にたいして神話的に作用していたわけで、そのため足利政権は、語り物「平家」の流通・管理のあり方に重大な関心を示したものらしい。

平家一門の鎮魂の物語は、源氏將軍家の草創・起源を語る神話でもある。それは足利政権にとって、現在に永続する秩序・体制の起源神話でもあつたろう。また「平家」が南北朝期に完成した新芸能だったことも、南北朝内乱の覇者、足利義満には格別の意味をもったにちがいない。あたかも古代の天皇神話が語り部によって伝承されたように、源氏政権の神話的起源が当道の語り部集団によって伝承されたのだが、しかしそのような当道と足利將軍の関係は、十五世紀後半の応仁の乱をさかいとして急速に後退したらしい。

足利將軍の権威を失墜させた応仁の乱は、將軍の権威を背景に確立した当道の内部支配を急速に弱体化させたきっかけでもある。また十五世紀末以降、「平家」は時代の芸能としてのアクチュアルな地位を失っていくのだが、そのような中世末の状況をうけて、「平家」語りを將軍家の芸能として再度位置づけたのが、足利氏にかわって源氏將軍家を継承

した徳川家康であった。

芸能としての「平家」は、現実の政治史と交錯・連動するかたちで推移したのである。たとえば、北条（平家）から足利（源氏）、織田（平家）、徳川（源氏）へいたる武家政権の推移史が、『平家物語』の源平交替史をなぞっていたことはいうまでもない。そのような物語と歴史、あるいは芸能と権力との微妙な交錯状況に注意しながら、本書は『平家物語』の芸能史について考察した。

第一部では、『平家物語』の覚一本（正本）の伝来について述べ、それと不可分に推移した当道の歴史について考察した。当道と足利将軍の関わりは、源氏将軍家の草創神話としての『平家物語』の一面を浮き彫りにする（それは同時に、『源氏物語』という王朝古典がもちえた神話的な意味をも浮上させる）。また、正本の伝来に関連して、その周辺本文である非正本系の位置、および、非正本系の本文と「平家」演唱との関係を検討することで、非正本系の本文から、いわゆる八坂流（八坂系）の本文が創出される過程について考察した。

第二部では、当道盲人（琵琶法師）の中世的な実態と、中世末から近世にいたる当道の変容過程について考察した。近世の幕藩体制のもとで、当道は幕府の支配機構の一翼に組み込まれる。だが、中世における盲人芸能者と、かれらを取りまく各種職人、道々の者たちとの（信仰を介とした）横断的な相互交渉は、中世の物語・語り物が生起する基盤をかいま見せるのである。

第三部では、中世的な「平家」演唱の実態について、可能なかぎり復元的な考察を試みた。その手がかりとして、九州地方に伝わる座頭（盲僧）琵琶の語り物伝承について考察したが、「平家」語りの中世的な実態、および語りと文字テキストとの関係の諸相は、盲人芸能者の口頭的な語りの考察をとおして具体的（復元的）にあきらかにされるのである。

当道の近世的なあり方から、中世の当道盲人（琵琶法師）を安易に類推することはできないように、近世平曲からただちに中世の「平家」をイメージすることもできないだろう。『平家物語』の研究プロパーでは、従来、近世平曲をもとに中世の「平家」を類推するという方法がとられてきた。そして近世平曲の流儀・芸風を中世にまでさかのぼらせることで、一方系と八坂系といった諸本の分類・系統化案さえ行なわれている。だがそのような憶測にもとづく研究がすすめられるまえに、芸能としての「平家」語りの実態が歴史的にあきらかにされる必要がある。中世の「平家」と近世平曲との距離が測定される必要がある。また中世の当道盲人と近世のそれとのあり方の相違があきらかにされる必要がある。

『平家物語』が語り物として広汎に流布・浸透したことは、わが国の歴史・社会を考えるうえできわめて重要な問題である。『平家物語』における歴史と芸能の問題について考えることは、日本社会という枠組みをなりたせた歴史の物語性を問いかえずことでもある。それは『平家物語』という個別の一作品をこえて、物語と歴史との交錯の相を考えるうえでも、ある普遍的な観点を提供するだろう。